

富田常雄著

鳴門太平記

朱長郎

第三卷

-朱 長八郎-

第三卷

富田常雄



鳴門太平記 〈第三卷〉

昭和三十七年十二月十六日 印刷
昭和三十七年十二月二十日 発行

定価 二六〇円

著 者 富田 常雄

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(組)代表七一一―九
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷・二光印刷株式会社 製本・新宿 加藤製本所

© Printed in Japan

目

次

旅路……………七

かくれ相撲……………三

江戸異変……………元

魁偉録……………七

人海……………六

阿吽……………一〇

群

狼

二六

風

神

二九

女

小

姓

二五

裸

心

二七

光

と

影

二九

平

家

蟹

二六

挿 装

絵 幀

岩 村

田 上

専

太

郎 豊

鳴門太平記 — 朱長八郎 —

第三卷

旅
路

一

芝白金にある紫雲山瑞聖寺の住職、良寂和尚は島田の宿に入る時、綱代笠をあげて、大井川の彼方の空を眺めた。

「お身達とのこの旅も、こころ辺で終わりとなろうも知れぬの」

と、六十七歳の和尚は独りごとのように言った。

駿河屋のおすがは駕籠の中で、その声をきき、なにか、ハツとした。

「なんと仰っしゃいます。和尚様、お嬢さまとあつしとは四国まで旅を致しますものを」

供の平次は驚いたように良寂和尚を見た。

「その志は知っておるが、しかし、障りが起こることもあらう」

「どうして、それが、お判りでございますか」

「心耳」

と、和尚は短く答えた。

「して、和尚様は」

「雲水じゃ。宿る寺はいずこにもある。ただ、わしは駿河屋夫婦の依頼ゆえ、おすがを護って旅を共にして来たが、その護りも、こころあたりで用が無くなるであろう」

良寂和尚は齒一つ、こぼれていない口を開けて笑って見せた。併し、齋の平次には和尚の言葉を完全に消化できなかった。

ただ、この六十七歳でありながら櫻鑢たる老僧の健脚ぶりには仰天させられていた。江戸から五十二里余のここまで、柳の枝一つを手に、平次を常に、なかば走らせるような速さで歩くその脚力は、同時に、和尚の精神力の強靱さを物語っていた。

「駕籠屋さん、ちょっと留めて下さいな」

自分で旅駕籠の垂れをあげ、おすがは草履をはいて外に出た。

「和尚さま、どこぞへ行かれてしまいますの、すがと平次を捨てて」

おすがは訴えるように訊いた。

「捨てはせぬ。ただ、この旅の卦が、この辺を吉凶の境としているからじゃ」

「心細いことを。すがは遠い阿波の徳島にまで行くのでご

「さいますよ」

「されば、わしもそれは承知じゃが、は、は、まあ、よい、日のあるうちに宿を取りなされ。わしはこの青巖寺に一宿するからの」

良寂和尚は慈愛のこもった眼ざしで、しょんぼり立っているおすがを慰めた。

朱長八郎を恋うるあまりの旅だった。上州草津まで彼を追って会うことの許されなかったおすがを、絶望の床から起きあがらせたのは、徳島行きを許した両親と、旅を共にすることを承諾した良寂の慈悲によるものだった。

吉凶いづれが訪れるかは知らず、おすがは和尚に言い渡されて限りなく心細かったのである。そして、その凶はおすがを乗せた駕籠と供の平次の背後にあった……

「親分それじゃ、こういう醜い体の乞食となったから、文六を捨てなざるとでも仰っしゃるんですかい」

元は駿河屋の中番頭だった文六も、おすがへの横恋慕から草津まで彼女を追ひ、自らの淫情のため、熱湯に落ちて大火傷して以来、又、駿河屋の周辺を徘徊していたが、大森さざ浪伝兵衛に出会ふと、そのまま、彼の側を離れなかった。男色の情を楯にしての捌みだった。

「決して捨てるとは言わねえが、急に江戸がやばくなつて、永え草鞋をはいた俺だ。今は足手まといが困るのよ」

六尺豊かの大男で、十人力と称されたさざ浪伝兵衛はうんざりした顔をした。

「前に、わたしを手籠めにした時は、女房役にしてやると言つたのに、今は足手まといなどとは、あんまり薄情な」

文六は女のように執拗だった。

「あの時か。いや、あの時はお前も女のような肌をしていて堪らなかったが、今は人三化け七……いや、さ、いくらおかま好きの俺でも追われる身では、その気にもなれねえ。こゝろで別れよう。ここに一両ある。これをやるから、非人乞食の真似は止すがいい」

そう言つて、伝兵衛は文六に小判を惜しそうに手渡し

た。

「親分は、やっぱり、あの娘を」
と、文六は遠くに行つたおすがの旅駕籠と、平次と連れ立つ良寂和尚の後ろ姿を指さした。

「どうでも、手に入れようとなさるんだね」

「いいや、あの坊主がいては、どういふものか、手が出ねえのよ。法力とでも言うんだらう」

伝兵衛は本心を隠して空を使った。

「伝兵衛親分、お前さんは人相書きが廻されて、品川の非人頭の松右衛門の手下に追われていなさるんだよ。あんまり、薄情にすればあたしが、訴えて、居どころを教えてし

まうからね」

「そんなことをしやがったら、手前てまえから先に一ひねりて殺してくれらあ、行きやがれ」

顎をしゃくって言うのと、伝兵衛は大股に遠ざかって行った。

二

いかに大胆なさざ浪伝兵衛でも、昼の東海道筋では、おす、がを襲うことは不可能だったし、又、夜の宿で、これを襲うことも容易ではなかった。

良寂和尚に別れたおすがと平次が島田の宿の、かぶとや七郎右衛門方に上がると、意外にも、大井川は川止めだというこだった。

「番頭さん、街道筋には一粒の雨も降らねえと言うのに川止めというのは可笑おかしな話じゃねえか」

敷居に膝をついて、もみ手をする番頭に、平次は食ってかかった。

「へい、ご尤なまもで。大井川のこの辺に雨は降っておりませんが、川の源みなもとに大雨があつたらしく、大水になり、とてもじゃございせんが、二、三日は水が引くとも思われません」

「ふん、そうか。人の噂だが、大井川が川止めになりやあ、

金谷かなや、島田あたりの宿屋が一ぱいになり、宿賃もつり上がるから、宿屋の方じゃ、大水になるのが有難く、手前の家が流れても銭にさえなりや、いいと言うそうじゃねえか」

「飛んでもございせんよ」

「又、渡し守の方じゃ、船の無い大井川だから、蓮台れんだいや肩車で人を渡すという強味から、むやみやたらに渡し賃を上げやがって、むさぼり取るそうじゃねえか」

平次の言うことは事実だった。

「へ、へ、そう仰おほっしゃられては身も蓋ふたもございせんが、何卒、ご辛抱下くださいまし、相手は川でございますから」

そう言い、番頭はこそこそ引き退がって行った。

日数ふる たびのあはれは 大井川

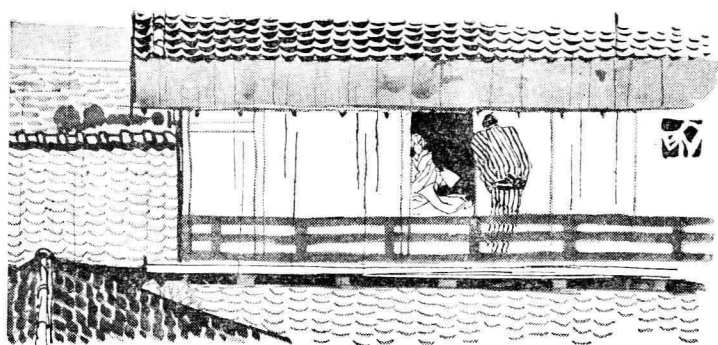
わたらぬ水も ふかき色かな

と、詠よんだ源親行の歌があるが、大井川は三日すぎても水が引かず、しかも、源に降ったと言う雨が前日から東海道とうかいだうのこの辺にも降り始めた。

「平次、和尚様がおっしゃったように、この島田が今度の旅の吉凶きうきんの岐れ路まがみちになりそうだね」

川止めに腐り切ったおすがは平次の顔を見ると恨めしうに言った。

「申しわけございませんが、お嬢さま、渡しの人足も川へ入らず、こればかりはどうしようもございません」



平次は当惑したように言った。

「いくらでも駄賃を出すから、蓮台でも、肩車ででも渡れないものかね」

おすがは焦燥のあまり口走った。

「ご免なすって」

その時、声をかけて廊下にうずくまる気配がした。

「誰だい」

「へい、旅の者でござんす」

そう言い、そっと、障子を開けたのは、さざ浪伝兵衛だった。平次とおすがは思わず、顔を見合わせた。大男だったからである。併し、これが、駿河屋を襲い、おすがの体に手をかけた火付け強盗のさざ浪伝兵衛であるとは気が付かなかった。襲われた時は頬かむりをしていた上、暗い夜の出来事だったからである。

「今、廊下を通りかかって、お嬢さまのお話をきき、ごもっともと存じて伺ったのでござんす。わしは元、一乗山と言った関取でござんすが、上方に住むお袋が大病という報らせに、江戸からここまで上りましたが、川止めを喰らって、御同様、いらしてたんでござんす」

と、伝兵衛は素朴を装った。

「今、川まで行ってみると、渡しの人足は出ねえようだが、なあに、あのくらいの水勢なら、結構、渡れねえこともねえと思ひ、それで、宿へ宿賃を払いに戻って、今、お話を耳にしたのでござんす。わしは十人力。あれくらいの水勢なら、なんの苦勞も要らねえ。もし、お望みなら、背負うか、肩車して、お二人を向こう岸へお渡し申しやしょう。なあに、駄賃などは要りましね」

言われて、おすがと平次は顔を見合わせた。



「平次、どうしようかね」

おすがは心の急ぐまに、伝兵衛の申し出を受ける心組みになっていた。

三

「もし、閑取。お前はん、ほんとに渡れると言いなさるのか」

駿河屋の一人娘を預かっている責任上からも、鳶の平次は念を押さざるを得なかった。

「万事は、この腕っ節でござんす」

と、さざ浪伝兵衛は己れの腕を丁と敲いて

「わしのこの体を流すほどの水はござんせんわい。大井川を裸で渡り切れるのは閑取の他にはござせん。土俵入りのコツでござんす」

大男は頼もしいが、平次には未だ不安があった。

「お嬢さまをどうして渡すのだ」

「さればでござんす。おんぶして渡ってもいいが、それでは、お嬢さんの体に触れて、定めし気色が変わるだらうから、わしは川越所へ行って事情を言い、蓮台を手に入れて、お嬢さんをそれに乗せ、わし一人で担いで行きましょうわい」

さざ浪伝兵衛は自信を持って言った。

「それ、番頭どん、この二階の欄干からも見えるべえ。水が出たと言っても、大井川は広くて、どこにも洲がある。わしは先ず、お前さんを最初の洲におろし、次に、お嬢さんをその洲へお連れすれば、心配することはなかべえ」

「うむ」

平次は未だ躊躇していた。

「平次、どうやら、雨も止んだようだから、いっそ、渡りましょう」

心の焦っているおすが、はせがむように言い募つた。

「だが、お嬢さま、いくら、相撲取りの力持ちでも、平次は心配でございます」

「だって、平次、このままでいたら、いつ、川止めが解けるやら判らないじゃないの」

「この分では、二、三日で川止めを解くとは思えねえ。島田も金谷宿も、さんざん儲けた揚げ句、渡しの人足の方では恩を着せ、法外もねえ渡し賃を強請に違ひはごわせん。万事は、この一乗山に任さっしやい」

これだけ言われると、平次も心が動いた。

「丙辰紀行」に――

大井川は駿河と遠江との境なり。明日香川ならねど、霖雨ふれば淵瀬変はることたびたびなれば、東の山の岸を流れて、島田の駅、河原の中にある事もあり。西のかたに流れて、金谷の山に沿ふこともあり。又、一筋の大河となりて、大木沙石を流すこともあり。あまた枝流となりて、一里ばかりが間に分るる事もあり。されば昔より徒江興梁もなりがたき故、往來の人馬、川の瀬を知らざれば金谷に待つもあり、島田にとどまるもあり、渡りかかりて溺るる者もあり、辛うじて向かひの岸に至るもあ

り、島田、金谷の民、おのが家はただよひ流るれども、旅客の囊をむさぼるゆゑに洪水を悦ぶ。売炭翁が車衣にして、年の寒さを待つごとし。(中略) 八人がかりの台に乗せられ、又は肩車にて渡すもあり、相撲の関取は人を雇はず、自ら丸裸となりて土俵入りの如くわたるもあり、水勢、力にや劣りけん、波は左右へ分れける。卿相の雲客、列国の諸侯は駕を台に据ゑて、多くの役夫をもつて昇き渡す。水堰きの傭夫は前後に囲ひ、急流に足を揃へ、声を合はせて渡す。紅葉散り、時雨する頃は水落ちて、冬川の寂しきに、渡守は弱り、水かさますます夏川を質に入れ、貸し借りの沙汰、羅山子いへる如く、己が草の戸は流るれども、首たけの借錢をなして、五月雨の水に威をまし、下り酒の菰を解いて処々に宴す。島田、金谷の渡丁すべて七百人なり。霖雨降り止まずして、水かさ増しぬれば、川止めとて、東西の駅中、所せまきまでふさがり。一駅二宿も後へ戻りて水の落つを待つもあり。云々。

関取は自分の力で渡れるという通念は、昔から大井川に存在していたから、さざ浪伝兵衛の言い草も満更ではなかったのである。

雨は止んだが、河原に出て見ると、洲の残った処こそあれ、瀬をなして流れる急流には激しい水音があった。

おすが、と平次を連れた、さざ浪伝兵衛は蓮台を肩にし、その流れの前に立った。

四

伝兵衛は小手をかざして、大井川の濁流の向こうに見える中洲を眺めながら、心細そうに河原に立ったおすがと平次を振りかえった。

「ごらんせえ。あの中洲まで、先ず、番頭さんを肩車で送るべえ。いかに、大力のわしでも、四人、八人で担ぐ、この蓮台に二人を乗せて、一人で担いじや渡れねえから」と、伝兵衛は川越所から借りた蓮台を指さした。

「さあ、番頭どん。肩に乗りなされ」

さざ浪伝兵衛は禪ぜん一つの素っ裸になり、平次を促して、そこにしゃがんだ。隆々たる筋肉が積み重ねられたような赤銅色の体軀で、背中にも胸にも、房々と毛が生え、おすがには眩くらしく、又、恐ろしいほどの男性的な肉体美だった。「それじゃあ、お嬢さん、待たっしゃい。だが、ここらは悪い川越え人足がいるから、しっかり気をつけさいやし。なあに、宿は遠くはねえから、そんな時は声をたてれば大丈夫だで」

言い残すと、そのまま、伝兵衛は平次を軽々と肩車にのせて濁流に踏みこんだが、水深は彼の胸元までなので、水

勢を押しきって進む彼は、一本の大木の根を水が分けるように、白波を左右に立てながら、みるみる小さくなって行った。やがて、洲に達したのか、平次がおすがに手を振って見せた。

この時、川止めで、暇を持てあましていたらしい川越え人足が、いつの間にか、おすがを遠くからとりかこんでいたのが、男の姿がなくなると見ると、忽ち、寄って来た。「やあ、大した別びんだ。娘さんよう。蓮台へ乗せて渡して上げるべえ」

半裸の一人が眼尻を下げて言った。

「いいんです」

おすがは毅然とした態度で斥はきけた。

「へっへっ、俺は肩車で渡すべえ。一緒に溺れ死んでも本望だぞ」

「俺はおんぶして、尻を抱いて渡って上げべえ」

と、人足達は口々に淫おどろらな言葉を吐き始めた。

「この蓮台は川越所のものだがよ、俺達はクジ引きで、八人をきめてよ、この娘さんを渡してやるべえ。なあ、駄賃なんか要らねえ。なんと、兄弟、駄賃なんか要らねえなあ」

と、最初の人足が仲間を見廻した。「そうだ。クジだ」

「クジだ、クジだ」

人足達は口々に叫んだ。蓮台に乗せてしまえば煮て食おうと、焼いて食おうと、クジに当たった男の冥利と心得ていた。

「お黙り、どかないと大声を出すよ」

当惑して、おすがは声を鋭くしたが、その時、伝兵衛がのっそりと河原に戻って来た。

「やあ、手前達、お嬢さんになにをしようと言うんじやい。

わしは一乗山という相撲取り、京にいるおふくろの命があぶねえと言うので、このお嬢さんを向こう岸に渡すのだ」

と、伝兵衛は人足を睨め廻した。

「なにを言いやがる。蓮台は俺達の商売道具だ。減多に使われてたまるものか。その上、今は川止めだぞ」

最初の人足が息まいた。

「川越所のお役人が事情を知って貸して下さった蓮台だ。

その上、川止めも、この一乗山なら大丈夫、あぶなくねえとお許しが出たんだ。文句のある奴は出て来さっしゃい」

一対五ぐらいでは、到底、歯の立つ相撲取りではなさそうだが、人数が多いだけに人足共は気が強かった。

「渡させるもんか。やつつけろ」

「この大水だ。相撲取りでも、ひとりて蓮台を担げるものか。この娘を川中で手籠めにしようという肚に違えねえ。

やつつけろ」

「合点だ」

多勢をたのんだ人足達は手に手に棒切れや石ころを持って、どっと、さざ浪伝兵衛に襲いかかった。

「野郎共つ、命は惜しくねえかい」

伝兵衛は怒号すると、人足の群れに飛び込んだが、その大力で手当たり次第に投げにかかった。

「うわーっ、うわーっ」

喚声だけは大きかったが、五人倒れ、十人がへばり、五人までも起きられなくなったのを見ると、人足達は次第に遠のいて行った。

「もう、安心でござんす。さあ、乗んなされ」

おすがは伝兵衛に促されて蓮台に、おそるおそる乗った。

伝兵衛は先棒二本に両手をかけ、かるがると水平に差し上げて、そのまま濁流に踏みこんだが、心は期待におのいていた。一度は駿河屋で、そのやわ肌を手をかけた娘である。それを独占することができると思うと、心が躍ってならなかった。

おすがは蓮台の上に裾を氣にして坐っていた。

五

遙かの洲で、供の平次が手を振って、自分の存在を知ら